

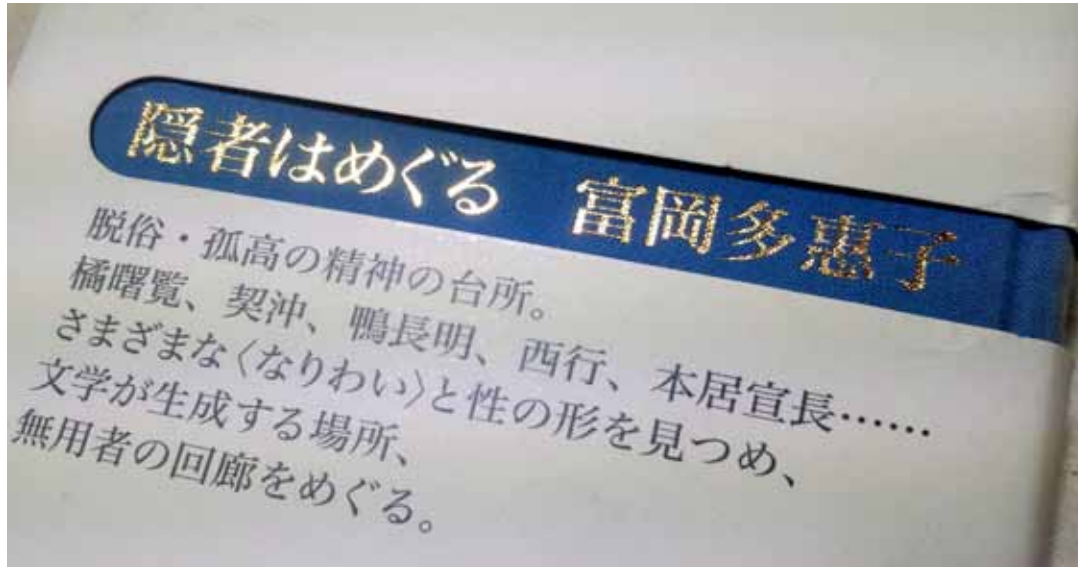
mediopos 8

2015.5.10 ~ 2015.6.3

【神秘学ポエジー～風遊戯 第21集】

media-photo-poesie ヴァージョン

神秘学遊戯団



■富岡多恵子『隠者はめぐる』（岩波書店 2009.7）

「世を遁れる」といっても、遁れられるものだろうかというのが、いくたりかの、世間の「外に居る者」（少なくとも外に居たいと思った者）の様子をわずかながらも窺ってきた感慨である。町人の気儘と僧侶の遁世を同列にするのはおかしいといわれそうだが、「隠者」が多く「文芸」にかかわるのも考えさせられる。「世を遁れる」者、「世から隠れる」者が「歌」であれ、「日記」であれ、「隨筆」であれ、或いは「学問研究」の著作であっても、それらは結局世（の人）に訴えようとするものなので、「世を遁れる」「世から隠れる」とは避けがたい矛盾がある。／今ひとつは、かれらの行為、行動（「歌」その他）は、世間の俗人のように生産にかかわらぬものなので、その時、その日の糧を得るための一文の稼ぎも保障しないから、「世を遁れ」「世から隠れる」本人をだれが養うかのモンダイがあり、荘園のあった中世の貴族の出身者や国が衣食を保障した「官僧」、町人でも寒月のような「親の金」がある者は別として、本人を本人が食べさせるとしたら、一体ナニをそのための稼ぎ仕事（托鉢、乞食は別として）にし、またそのことで本来したい「歌」なり「文芸」なり「学問」なり「遊び」なり「瞑想」なり「修行」なりが、どの程度可能かもモンダイとなり、やがてそれらを糊口のたしにするとなれば職業化されることになって、これまた矛盾にちがいない。「隠者」のすべてが、『堯心集』で長明が記したような、修行の姿さえ知られると消えて行方不明となる僧侶や聖のようではないだろうし、またそうもゆくまい。「隠者」の残した仕事、高潔、孤立、孤独、寂寥、覚悟、その境地またはそこへの憧憬等々を称揚することは、のちのひとによって行われてきていても、世を遁れて「隠」の者でありえたこと、即ち隠遁、隠棲等の「隠」を具体的に支えたものの考察も世間の「外に居る者」の招待をより知る手がかりになるように思われる。

世を遁れるためには
世の中に隠れることだ

世間の外にいるために
世間の中にいることだ

俗のなかで生きて
俗にとらわれないことだ

無用者といわれても
糊口をしのげればそれでよい

世の中は空の雲である
雲を去れば青空が広がる

嵐の時も吹雪の日も
過ぎ去る風景にすることだ

死のときでさえ
ただの風景にすることだ



■『ホルヘス詩集』（鼓直訳編／思潮社 海外紙文庫 13 1998.12）

（共犯者）「磔刑に処せられて、わたしは十字架と釘にならねばならない。／杯を差し出されて、わたしは毒人参にならねばならない。／欺かれて、わたしは虚言にならねばならない。／火を放たれて、わたしは地獄にならねばならない。／時の一瞬一瞬に称賛と感謝を捧げなければならない。／あらゆるものがわたしの養いとなる。／宇宙の正確な重量、屈辱、愉悦。／この身を傷つけるものを、わたしは義としなければならない。／この身の運不運などはどうでもよい。／わたしは詩人である。」

光になるときには
闇にもならねばならない

天とともにあるときには
地とともにあらねばならない

善きことをするときには
悪きことにも開かれていなければならない

正しくありたいと思えば
邪なみずからをも認めねばならない

美しくあるならば
醜さをも厭ってはならない

幸運であろうとすれば
不運さえも拒ばないように

生きんと欲すれば
死とともにあることだ

やがてそれらが
ひとつとなるために



だれを鏡にすればいい
自分が鏡にならぬなら
己にやさしい人でなく
敵意を燃やす人にせよ
そこに知らぬ己がいる
まだ見ぬ己の顔がある
ありのままが映されて
それで消沈するならば
自分はただそれだけの
己にやさしい人なのだ
そのやさしさの裏側に
己を殺す剣は隠されて
笑顔のままに己を滅す
だれを鏡にすればいい
自分が鏡にならぬなら
敵意のなかで己を磨け

■『シェイクスピア詩集』（関口篤訳編／思潮社 海外詩文庫1 1992.11）

（己を映す鏡）「そこでだ、ブルータス、まあ聞いてくれ。／自分を見るには反射する鏡が必要だと君は言ったな。／では、おれがその鏡になろう。君自身の知らぬ己の姿を／ありのままに映してお目にかけよう。／だが、おれを疑うなよ、ブルータス。／おれは調子のいい道化に見えるか？／相手が好意を顔に浮かべると／やたら誓いの言葉を安売りする、そんな男に見えるか？／人前では尻尾を振ったり、じゃれついたり、／それでいて裏にまわれれば陰口のつきほうだい、／宴会の席では見境なしに友人面を売りあるく、／そんな男なら／おれを危険な男と思うがいい。」



■土取利行『螺旋の腕』（筑摩書房 1988.5）

「深く精神を集中し、カーボン紙の上をスティックで打つと、そこに宇宙の星のパターンが刻印されるとい
う話を、かつて聞いたことがある。これは人間の運動エネルギーが、宇宙の運動エネルギーに同調したことを
示す一例であるが、音楽もまた、このような宇宙の法則に支配されていると思う。／銀河系を形成する
二千億個の星の一つにすぎないわたしたちの地球は、円盤状をした大星群の中枢部より派生し、周縁部を形
成するスパイラル・アーム（螺旋の腕）とよばれる所に位置しており、そこでは無数の星が生成消滅をくり
かえしているという。／星が様々な螺旋運動によって生じるように、音楽もまた螺旋構造をもつ人間の体や
楽器、両腕をつかう曲線的な演奏技法を通じて創生されるが、銀河系の星々を派生させる中枢部、そして音
楽を生みだす根源的なものは、共に思考や言語の領域をはるかにこえている。／わたしは子供のころから、
音とも光ともいいがたい、ある不思議な存在を感じ続けてきた。それは宇宙にたえず鳴り響いている、とて
つもなく大きく、かつ微細な、表現不可能なものであった。わたしは、このとらえがたいなものに駆り
たてられ、世界中を巡り歩き、音の旅を重ねてきたといってもよい。／世界の国々には、異なる時代や社会
を背景にした、それぞれに異なる技法や形式をもつ音楽があった。銀河にまたたく星のように、野に咲く花々
が様々な色や形をもつように、所々によってまったく違う美しい音楽があるのは素晴らしいことであるが、
わたしはまた、違う外様をもつ音楽の根底にあるもの、根源をみることも忘れなかったつもりである。」

星の音楽が聞こえるとき
私の魂は螺旋を描きながら
星とともに踊っている

星の音楽が聞こえるとき
樹の音楽も聞こえるだろう
そして私は樹とともに
天へ向かって歌うだろう

空の音楽が聞こえるとき
私の魂は風のように流れながら
空とともに踊っている

空の音楽が聞こえるとき
花の音楽も聞こえるだろう
そして私は花とともに
色を放ちながら歌うだろう

mediopos-180

2015.5.14



■平出隆『葉書でドナルド・エヴァンズに』（作品社 2001.4）

（1998年10月19日。オルデンバーグ号にて）「親愛なるドナルド・エヴァンズ、／星が、星座をくずさないままに降るようだ。漆黒の闇の中の急な崖道を伝って、オルデンバーグ号の停泊する入江へと下りていった。途中、足下にまわりつく猫があらわれた。踏みそうになると、素早く数メートル先へ下り、また足にからまる。引き留められているのかも導かれているのか分からない、夢の境のような歩みがつづいた。／ようやく入江に降りると、ひそひそと話しながら艇を待つ乗合客たちが、すでに、影のように立っていた。猫はいつか消えていた。／ぼくはぼくの郵便物を積んでいるはずの船に、彼ら見知らぬ影とともに、艇から乗り込んだ。それが、いまゆっくりと波を分けはじめると、星はいよいよ降りかかってくるようだ。／さようなら、ドナルド。ぼくはいま旅立ったところだ。世界へ、世界から。すべてはまるで違って、親しいドナルド、ぼくにもすべてがあたらしい。」

*ドナルド・エヴァンズ:1945年、アメリカ、ニュージャージー州モリスタウンに生まれる。画家。空想の国を造り、そこが発行する想像の切手を描きつづけた。1977年4月、アムステルダムで火事に遭い、31歳の若さで急逝。

空想の旅にでるのなら
星降る夜にでかけなさい

空想の光で照らすなら
夢の境で歌いなさい

空想の愛がほしいなら
花いっぱい園に遊びなさい

空想の生を生きるなら
記憶の故郷を歩きなさい

空想の私を探すなら
仮面の国で踊りなさい



■松居友『昔話の死と誕生』（大和書房 1988.4）

「昔話が、いかに誕生したかは、大変胸部深い問題で、心の深層におけるその誕生と生成の過程は、科学的に見た宇宙の誕生と生成の過程と似ているような気がしてなりません。」

「昔話は、たえず意識と無意識、光と闇、あの世とこの世の両極の作用を受けて生成する、宇宙のごとき、生命のごときものであり、よって固定化されることもなくたえずメタモルフォーゼしてゆく、最も原初的空間より発生した人間の無限の心的エネルギーの現象の一つでありましょう。」

むかしむかし
あるところに
光がありました

光はひとりぼっちで
遊んでくれるひとはいませんでした

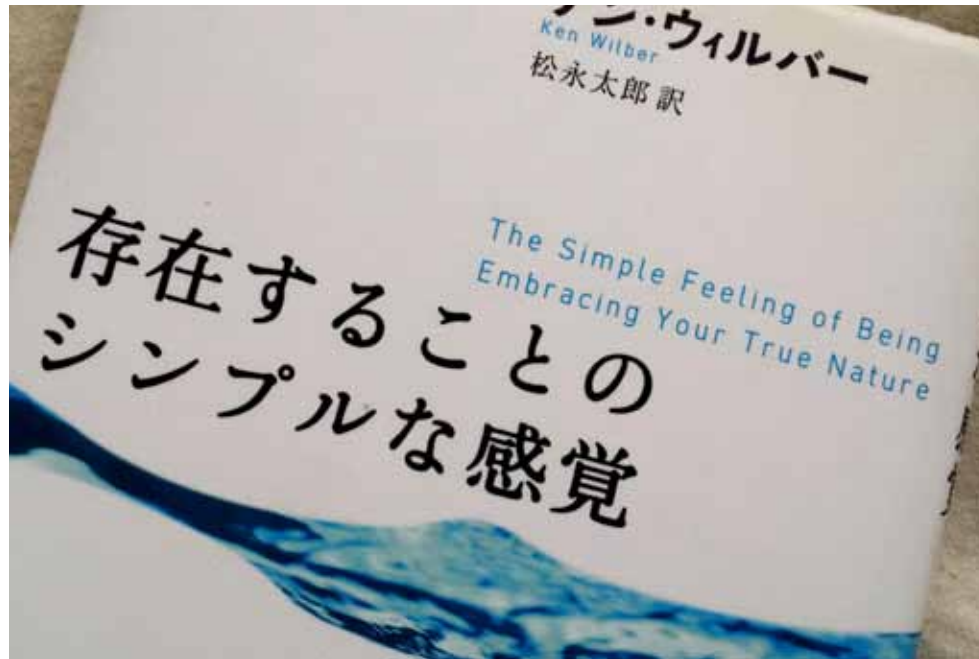
ひとりぼっちはさみしいので
友だちがほしいと思いましたが
まわりにはだれもいなかったのです

光は自分のなかから
闇をつくりだして
それを友だちにしました

闇がまわりにあると
光は闇を鏡にして
自分を見ることもできました

闇は光がないと
自分は存在できないことを知っていましたが
光のことを次第に疎ましく思うようになりました

光と闇の物語はこうして
いまでもずっと続いているのです



■ケン・ウィルバー『存在することのシンプルな感覚』（春秋社 2005.11）

「私たちが、常に現前する意識として安らぐとき、わたしたちは時間のなかにはいない。わたしは、わたしの前を、あるいはわたしを通して時間が漂っていくのを見る。ちょうど雲が空を漂っていくのを見るように。わたしが時間に気が付くことができるのは、そのためである。わたしの単純な現前、純粋で、単純なコスモスの「目撃者」としてのわたしとして、わたしには時間というものがない。／今ここで、わたしは単純で、常に現前する「目撃者」として「スピリット」とともにある。この単純で、常に現前する目撃の状態において、今日、わたしは、神とともにある。エックハルトは言っている。「神は、わたしよりもわたしの近くにある」。なぜなら、神もわたしもこの常に現前する「目撃者」のなかで、一つであるからである。（・・・）／この「スピリット」それ自身が、常に現前する「目撃者」の状態に入る、ということではない。わたしは、この状態に入ることはできない。なぜなら、それは常に現前しているから。わたしは、「目撃」という行為を始めることはできない。わたしは、ただ、この「目撃」という行為がすでに起こっていることに気が付くことができるだけである。この状態は、時間のなかで始まるのではない。まさに、それが、常に現前しているからである。あなたは、そこから逃げることも、そこへ向かうこともできない。あなたは、それそのものなのである。」

私はいまここにいる
私はただ見ている

見るものと見られるものが
分かれる前の私として

私が私であることはすでに
永遠のなかで安らっている

私のほかにはなにもものもない
すべてはいまここにある

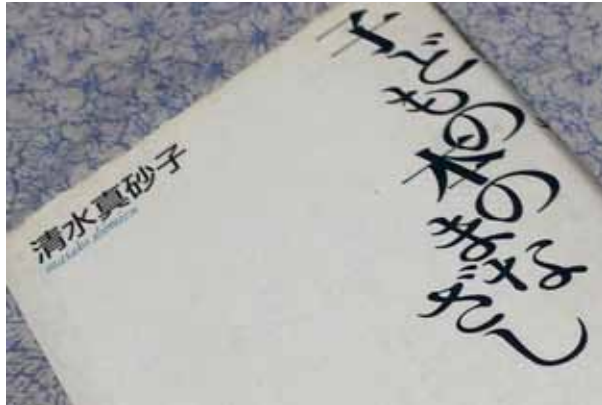
愛するときすでに愛されている
愛という気づきのほかになにもない

祈るときすでに祈られている
祈りという気づきのほかになにもない

私はいまここにいる
私はただ見ている

mediopos-183

2015.5.17



■清水真砂子『子ども本のまなざし』（JICC出版局 1992.2）

「三人の世界を追い求めようとしたのはなぜだったのか。そもそも、なぜこの三人だったのか。ここにきて、ようやく私もそのわけがわかり始めたような気がする。／私は、たぶん、まじは日々を生きのびなければならなかったから、そのために技術がほしかったのだ。子どもだった私も、五十代に入って私も。私はそんなに不器用な子どもだったろうか。いまもそんなに不器用か。どうは思わない。私はふりをすることができたし、今だってけっこう演じることができる。どこにでもいる、ごくふつうの人間といえるだろう。が、ふつうの人間がふつうに生きていくためには、なんと賢さが要求されることか。なんと知恵と技術がいることか。それがカニグズバーグの世界には用意されているのだった。（…）この世界を生きるための一級の実用書と呼びたいものがここにはある。／ピアスは技術を語らない。この作家の文学は原理である。この宇宙に生きて在ることの不思議さを、その哀しみとよろこびを語る。父を送り、ついには母も送って、世界が妙に広く、軽くなったのを感じたとき、ピアスの世界ならもどっていけると思えたのは、この作家が時代をこえた人間存在の深みに目をこらし、いつもやしを用意してくれていると信じられたからだろう。／ハミルトンは？ 私はハミルトンの世界にひとつの未来を見る。新しい時代を曳く思想が力強く、だが、時折はまだちょっと不安げに脈打ちだしているのを感じる。黒人と「インディアン」の血をひくハミルトン自身と自身につならなる人々の歴史から紡ぎだす自前の「物語」は、これまで欧米で支配的だった「物語」とは全くといっていいほどその性質を異にするから欧米のそれに慣らされてきたあとでは、とまどいを覚えるかもしれない。しかし、アメリカ社会を頭をあげて生きのびようとして、この作家はおそらく数限りない自問を繰り返し、そうやって生み出されたことばはいつか止揚の精神ともいべきものを獲得していた。世界への、そして歴史へのみずみずしい感覚をともなってハミルトンの作品は私たちにこんなふうになって生きられるじゃないの、と語りかけてくる。／この世をしのいでいく技術と、未来への展望と、その間に立って、原点に立ちかえって人間を考えたい思いと……。つまりは社会と時代と人間と、この三つを押さえておきたいとの思いが私にこの三人の作家を選ばせたのだと思う。」

*三人：E.L.カニグズバーグ、フィリッパ・ピアス、ヴァージニア・ハミルトン

私はおそらく
生きのびなければならなかったのだ
不器用な手と足をばたばたさせて

私という子どもが
子どもだったころ
大人としてのじぶんを
想像することさえできずにいた
そして大人になったはずのいまでも

私は生きる知恵と技術を
身につけているだろうか
生きていくために
ふつうに生きていくために
必要な知恵と技術を

私はそのまえに悲しみばかりを
抱えて生きてきたのではなかったか
私という私が私であるという
手と足と体をもって生きている
私であるということのまえで

私という私は
すでに子どもではなく
おそらく大人にもなれぬまま
私という私にさえなれぬまま
ただ不器用な手と足をばたばたさせて
生きのびてはいるのだが



■港千尋『ヴォイドへの旅／空虚の想像力について』（青土社 2012.9）

「ヴォイドの経験は、人間にとって意識下に影響するものだということは言語の使用についての考察ですでにみたとおりである。認知意味論は一見すると関係のないような思えるようなときにも、わたしたちの思考がメタファーに規定されていることを明らかにしたが、なかでも身体的な図式は基本的なものひとつだった。わたしたちは日常的に概念空間を容器になぞらえて考えており、その容器から何かを出したり入れたりしながら、考えを伝えようとしている。／身体的な図式は、皮膚、臓器、子宮、脳髄といった人間の解剖学的な成り立ちと結びつき、やはりそこから何か出てきたり、入れたりするというメタファーを支えている。頭からアイデアが出てこない、心がからっぽになるといった表現は、空間的にも時間的にも拡張される。それは「満ち足りた」人生というように、人間の生きる経験にまで拡張されることもある。／こうした身体的なヴォイドの経験は、人類が生まれこれまで生きてきた環境としての、地球の条件によっても規程されている。旧石器時代の永い年月を洞窟という自然のシェルターに守られてきた人類は、ごく自然に身体的環境と地質学的環境を結び付けてきただろう。人間の豊かなイメージ世界は、この能力に負うところが大きい。子宮と洞窟の結びつきは、おそらくもっとも古いもののひとつであり、旧石器時代の芸術から西欧の錬金術さらのアジアの諸宗教にまで連続と流れつづけるイメージであることもヴォイドの旅は教えてくれた。／身体的な経験、地質学的な経験と並んで人間にとって重要なヴォイドは、宇宙が与えるものである。前者とちがって、宇宙は直接手で触れることはできない。宇宙的なヴォイドの経験は、観察と思弁をとおして与えられるものであり、それが数々の神話を生み出すとともに、近代科学における宇宙観にもつながっている。」

私は空虚ゆえに
満たされることできる

満たされた器には
何も注ぐことができないから

耳が塞がれたとき
音は訪れることができないように

私は空虚ゆえに
世界に開かれている

そして世界も空虚ゆえに
無限の存在者を容れることができる

空虚な世界のなかで
空虚な私はときに不安になる

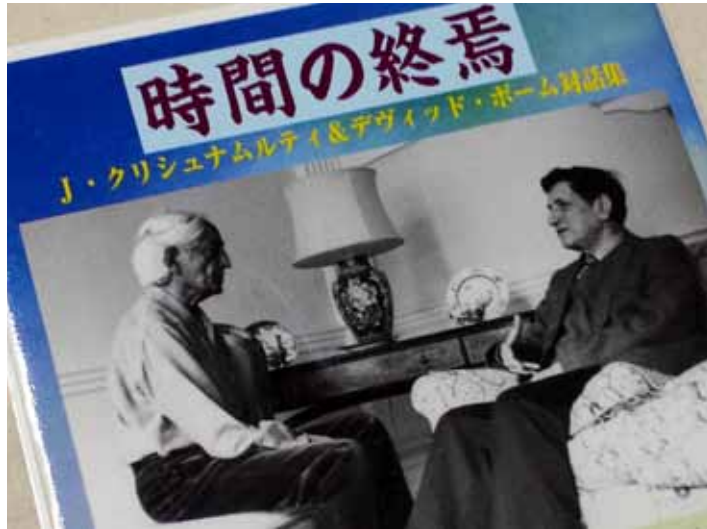
すると私の空虚に不安が満ち
不安な私が世界へと注がれる

空虚な世界のなかで
空虚な私に愛が注がれる

私の空虚に愛が満ち
愛の私が世界へと注がれる

mediopos-185

2015.5.19



■ J. クリシュナムルティ&デヴィッド・ボーム対話集『時間の終焉』（コスモス・ライブラリー 2011.1）
（DB：デヴィッド・ボーム/K：クリシュナムルティ）

「DB：人間性に真の変化が起こる可能性がある、あなたは知覚されているのですか？/K：もちろんです。さもなければ、何もかも無意味になってしまいます。私たちは、猿まねをしたり、機械のように決まりきった生き方をするだけの存在でしかなくなってしまおうでしょう。今までは、根源的に変化するためには、（神などの）外部のものが持っている力にすがらしかないと、それゆえ、私たちはそれをあてにし、道に迷ってきたのです。もし私たちが他の誰のこともあてにせず、依存からすっかり自由になれば、単独性が私たち全員に共通のものとなるでしょう。それは孤立ではありません。もしあなたが、断片化や区別の中で生きることの愚かしさを見て、その中で生きるべきではないと悟る時には、あなたは自然に単独になるのです。この単独性の感覚は、個人的なものではなく、私たち全員に共通のものなのです。/DB：が、通常、孤独感とは各々の人がそれを自分自身のものと感じるという意味で、個人的なものです。/K：孤独であることは、単独であることとは異なります。/DB：根本的なものごとはずべて普遍的であり、それゆえ、精神がそれ自身の奥深くに至る時には、それは、何か普遍的なものの中に参入する。そう、あなたはおっしゃっているのですね。/K：そのとおりです。/DB：その何かを絶対的なものと呼ぼうが、呼ぶまいが。/K：問題は、精神をそれ自身のずっとずっと奥深くまで至らせることができるかどうかです。」

ひとりのときに
ひとは愛することができる

ひとりのときに
ひとはふたりでいることができる

ひとりのときに
ひとは自由である

ひとりのときに
ひとは依存しない

ひとりのときに
ひとは断片ではない

ひとりのときに
ひとは機械ではない

ひとりのときに
ひとは孤独ではない

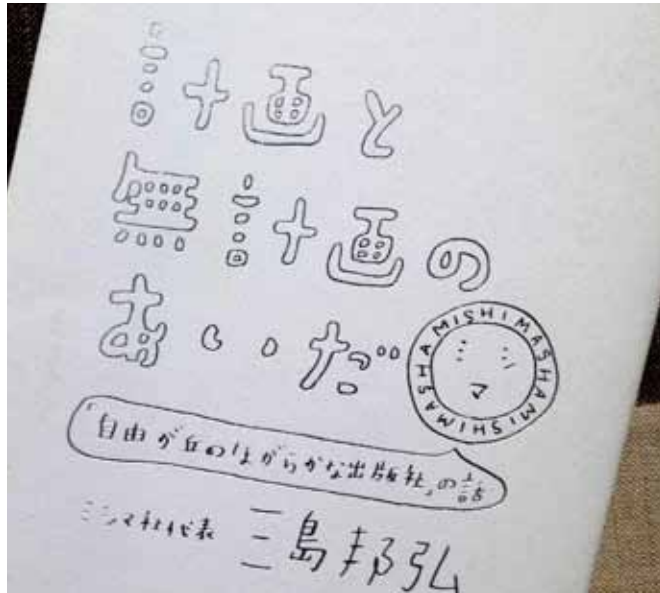
ひとりのときに
ひとは単独である

ひとりのときに
ひとは精神の奥へと向かう

ひとりのときに
ひとは存在そのものの種となる

mediopos-186

2015.5.20



どこまでも
自由であろうとする者よ

みずからの由を
律するものであれ

自分で糸を握り
空を遊ぶ風のように

自分に手綱をつけ
駆ける獣のように

計画と無計画のあいだを
大きくゆれながら

■三島邦弘『計画と無計画のあいだ／「自由が丘のほがらかな出版社」の話』（河出書房新社 2011.10）

「自由であるために計画線はいらないのではないか。感覚だけを頼りに、無計画線を延ばしていけば、自由は十分なりたつのではないか。そんな疑問をもつ人がいるかもしれない。／だけど、ほくはそれは違うと思う。／計画線のない状態。／これは、糸の切れた凧みたいなもので、風に乗ってどこまでも飛んでいくかもしれないが、逆に、どこに飛んでいくかもわからない。戻ってくる場所もない。つまり、コントロール不能。それは自由とはいわない。たんなる暴走だ。／計画線が引かれていれば、凧につながれた糸とひとしく、それがあから、凧は元の位置に戻ってくることもできるし、周りの人々を楽しませることもできる。／暴走は、誰も幸せにはしない。もちろん自分自身も。人が自由を感じながら生きるということも、この凧揚げの例とそれほど離れていないだろう。／「計画と無計画のあいだ」を揺れ動いているとき、人は初めて自由を感じる。そして揺れ動く二つの間隔が広ければ広いほど、自由度は高い。／これが、この五年間をふりかえる最中に得ることのできた、ほくなりの発見だ。」



■貞久英紀『雲の行方』（思潮社 2014.5）

■『貞久英紀 詩集（現代詩文庫 213）』（思潮社 2015.4）

「あるひとは、見えるものを通して見えないものを描こうとする。／べつのは、見えるものを通して見えるものを描こうとする。／筆者はこのべつのはのあり方を追求してみようと思った。しかし、見えるものが十分に見えるまでには、見えないところを遠まわりしてこななければならない。遠まわりをするなかで、これまで目にうつってはいたが見えてはいなかったものが見えてくることはありえる。しかしその結果そこに描かれるものは何かといえば、誰が見ても見えるものでしかない。／一本の木をながめている人は、ながめることを通して何かを思い起こしたり、連想したり、その木の用途を考えたりというように、しばしばAということがらを通してAとはべつのがらを導きだす。しかし、Aということがらを通してまさにAということがらが導きだされるような体験もひとは体験しうる。一本の木をながめるこちよを通して、そのながめているということそのものが生き生きと生きられているときのように。」

見えるものは
見えないものを通して
はじめて見ることができる

光は
光でないものを通して
はじめて光であることができる

わたしは
わたしでないものを通して
はじめて私であることができる

世界は
世界でないものを通して
はじめて世界であることができる

存在は
存在でないものを通して
はじめて存在であることができる

mediopos-188

2015.5.22

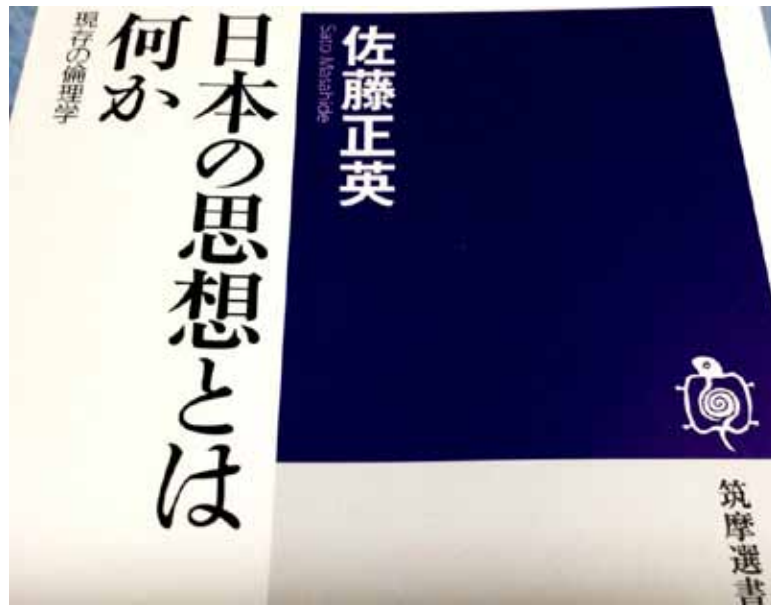


光のなかでは見えない光
夜がせまれば見えてくる
ひとつひとつまたひとつ
ほーっほーっ とほたる恋

恋のささやき光のことは
時代が闇に暮れゆく時に
光のなかでは見えない光
夜がせまれば見えてくる
ほーっほーっ とほたる恋

■ (写真集) 小原玲『螢』(ワニブックス 2002.7)

「光の跡は、時の流れの残像となる。／光の乱舞、聞こえてくるのは沢の音だけ。／宵闇の碧さを照らす光は、恋の囁き。／ほーっ、ほーっ。呼びかけが風に移り、光に包まれる。／民家に明りが燈るころ、螢も光りだす。／金螢の煌きが、森に光の絨緞をつくる。／春に苗を植え、夏に平家螢が舞い、秋に稲穂が実る。／星明かり、月明かり、螢の光に照らされて。／小さな手の中の光、来年へと夜に放つ。」



■佐藤正英『日本の思想とは何か／現存の倫理学』（筑摩選書 2014.9）

「倫理学は、ひとである生きものであるところの私たちが、ただ生きているのではなく、よく生きようとする衝動に駆られて、事物や事象、またもう一人の己れであるところの他者に出遭うありようを、総体として明かし、対象化する学問である。（・・・）／私たちは、自である<もの>と自である内なる<たま>の結節である己れとして、外なる他である<もの>との協和や他者との融合を希求しつつ、さしあたりの日々の暮しに追われている。日本の思想の核を形作っているのは、日々の暮しに影を落としているところの、究極のよい「生」である無窮無辺の時・空における存在そのものをめぐる、私たちの夢想・観念なのではなからうか。」

ものとたまはむすばれ
われらは生まれ生まれ
ものとたまははなれて
われらは死に死にゆく
ものとたまはたわむれ
ものとものはたわむれ
たまとたまはたわむれ
そのつかのまのあいだ
よく生きんとしまよい
なにを夢みているのか
ひとはなんであるのか
それさえわからぬまま

mediopos-190

2015.5.24



■山内志朗『つまずきのなかの哲学』（NHK BOOKS 2007.1）

「人生に結論はない。なにしろ、人生の最後になって、結論を書いている暇もないし、それを求めるのは残酷だろう。ではいつ人生の結論を書けばよいのか。／（・・・）常に「今・ここ」で書くしかないのだ。今ここにいる「私」とは常に人生の結論である。それは過去にあったものでも未来にあるものでもない。だが勘違いしてはならないのは、今ここにある「私」が結論だからといって、「もう何もしなくてもよい」という状態ではないということだ。／もう結論にいるのだから焦らなくてもいいけれど、仕事は終わって何もしなくてもよいという状態ではない。では、どのように振る舞えばよいのか。「私とは何か」ということが<謎>として与えられているように振る舞えばよいのだ。／私たちは、毎日身だしなみを整えるために、鏡を見るけれど、その鏡が曇っていれば、変な格好になってしまう。ヘタをすると変質者に間違えられてしまう。（・・・）／<謎>というものは、分からないでもなく、分かっているのでもなく、だからこそいつも自分の側に携えずにはいられない、そしてそうしたいものなのだ。／人生とは生きていなければならないものではなくて、生きていたいものだとするれば、「私」に<謎>として与えられていることは悩ましいことではない、人生とは答えが出てくるような試験問題とは異なるのだから。」

自分という謎が
道を歩いている

つまずいたとしても
それが今ここの答えなのだ

教えることのできるのは
過去の化石にすぎない

答えがないことが
その答えなのだから

自分という謎が
今ここを生きている

自分という問いを鏡に映しながら
今ここが生きられてゆく

mediopos-191

2015.5.25



■佐々木敦 『「4分33秒」論／「音楽」とは何か』（Pヴァイン 2014.6）

「時間芸術は全部そうなんだけれど、『4分33秒』は超純粋な時間の経過であるわけです。本当に粹しくない。これ以上純粋にやろうと思うと、あとは頭の中で考えるしかなくなってしまうようなギリギリの粹としてこの作品は提示されている。この純粋性が僕はすごく面白いと思う。／純粋な時間の経過がこの作品の本質だと考えると、その純粋さが証立っているのは、どんな作品でも結局はそういうものであり、そこが本質なんじゃないかということです。芸術というものの最低限、ミニマムな本質とは、時間が絶対に経過するということだと。／（・・・）僕は、聴取論的な文脈での音楽についての文章もいっぱい書いてきました。でも、やはりそこだけではなく、「時間」というテーマがむしろ自分が考えたかったことなんじゃないかと思うんですね。時間芸術って、自分の未来が削り貫かれる感覚があるわけです。これがタイムマシンという意味なんだけれども、これが要するに削り貫かれる未来としてある。もちろん聴きながら何か他のことも出来ますけど、でもこのCDを一枚聴くためには、確実に自分の有限な人生のこれからの時間の中の一時間が絶対に必要だという真理がある。／（・・・）こんな考えが何を意味しているのかというと、簡単に言って、人間はいつかは死ぬ、有限な存在だということです。せいぜい頑張っても百年ぐらしか生きない。人生は有限である。あたりまえですが、でも有限だからこそ、時間が純粋に削り貫かれるみたいなことが贅沢だと思うんです。映画で喩えるとわかりやすいと思うんですが、僕は何も起きない映画が好きなんです。」

*（ウィキペディアからの抜粋）「4分33秒」：ジョン・ケージが1952年に作曲した曲の通称。演奏される場合にはピアニストによることが多いため、ピアノ曲として取り上げられることが多い。この作品は、1950年代初頭に彼が創始した偶然性の音楽（不確定性の音楽）の最も極端な例である。楽章を通して休止することを示す tacet（オーケストラにおいて、特定の楽器のパート譜に使用されるのが普通である）が全楽章にわたって指示されているので、演奏者は舞台に登場し、楽章の区切りを示すこと以外は楽器とともに何もせずに過ごし、一定の時間が経過したら退場する。

地上を生きることは
時間を生きること

音楽を聴くためには
その無常を生きねばならない

4分33秒を聴くことは
無常のなかで未来を創ること

永遠を去るという
なんというスリリング

私は音楽を聴くのだ
無常のなかで

私は未来を創るのだ
無常のなかでこそ



■アーノルド&エイミー・ミンデル

『うしろ向きに馬に乗る／<プロセスワーク>の理論と実践』（春秋社 1999.8）

「執着を手放すことを学ぶには、あなたが日頃やっていることをしっかりとやり抜かねばなりません！ 闘いたいだけ、人生と闘うといいでしょう。人生をコントロールし、河の流れを変え、できるだけ自己中心的、野心的、頑固でありなさい。運命と闘いなさい！ どんなことにも、気がすむまでしがみつきなさい！ 少なくとも、運命が、もうたくさんとあなたから逃げていくまでは。これがプロセス指向的な学びです。人生の各段階を、それが現れるがままに受け入れ、それを生きぬきなさい。すると、自分でも知らないうちに、いつのまにかゴールにたどり着いているでしょう。／自覚がなければ、おそらくこの「新しい」ワークを学ぶことは不可能でしょう。そうはいっても、自覚はほんの一瞬しか続きません。そのようなときには、自覚をどのように忘れてしまったのか、どのようにがんばろうとしていたのか、どのように出来事の理解に失敗したか、自分がどれほど賢い解釈者になりたいと思っているのか、世界を変え、世界を征服したいとどれほど強く思っているのか、ということに注意を向けるのです。すると、最終的には――いや、またもやと言ったほうが適切かもしれません――何もかもが失敗に終わったそのとき、人生そのものがプロセス指向の考え方を教えてくれていることに気づくでしょう。結局のところ、とことん消耗しないことには、誰が自分を変える準備などできるでしょうか。崖っぷちに立たされてはじめて、われわれは――誰でも、いつでもというわけではありませんが――心を開き、うしろ向きに馬に乗る心構えができるのです。」

満たされたとき
欲望は姿を消すが
やがてまた同じ姿を現し
みずからを焼くだろう

その繰り返しを去るためには
みずからを焼き尽くし
欲望のベクトルを
裏返さなければならない

欲望を見つめることだ
欲望にみずからを語らせることだ
欲望の気のすむまで
欲望がその地平の果てに至るまで

人を変えようとするならば
みずからを裏返すことだ
世界を変えようとするならば
みずからを裏返すことだ

そのとき欲望は姿を変え
人は姿を変え
世界は姿を変え
みずからも姿を変えているだろう



■中澤吉郎『知と境界領域／中和と分極の神秘』（たま出版 2006.11）

「[存在・最高位の中和]、すなわち、絶対無は「存在者・分極体」、すなわち、宇宙・万物・我を産み出す根拠ですが、究極の絶対無としての<存在>自体は根拠・原因とは一切無縁の聖なる深淵です。／この絶対無を象徴的に内在的可能性を秘めた複素数(虚数 i を含む)空間としてとらえたとき、実数空間である私たちの現実世界から見ると、まったく見ることも入ることもできない超越空間となるので、客観的に観察し得ない一種の絶対無に対応します。この超越的虚数時間時空には私たちの空間での大小という比較概念がなく、無差別世界に見えますが、実は極座標表示での位相差が極めて重要な空間なのです。したがって、複素空間も何らかの中和基準の分極的実在（しかし、私たちの宇宙から見ると虚の世界）であり、究極的には真の絶対無へ帰還すると考えられます。」

神秘とは

私があることだ

世界があることだ

なぜ私があるのか

なぜ世界があるのか

その故郷が絶対無にあるからだ

名づけることも

分けることもできない

絶対無は深淵に安らう

その複素空間から

やがてみずからを分かち

存在者を産み出してゆく

その遊戯こそが神秘なのだ

私は世界はその遊戯のなかで

やがて絶対無へと帰還してゆく

mediopos-194

2015.5.28



■森本哲郎『そして—ぼくは迷宮へ行った。』（角川文庫 昭和54年9月）

「考えれば考えるほど不思議だった。地面に生垣をつくっただけで、どうしてこんな迷路ができあがるのだろうか。檜の木を植えただけで、なぜ、こんな魔法の森のような幻想の世界が生まれるのだろうか。わずかに数歩歩み入ることによって、現実の世界は、はるか彼方に消え去り、天地に自分がたったひとり取り残されたような気持ちになってしまう。これは、いったい何なのだろうと、子供心に漠然と考えた。しかも、不安な、怖ろしいようなその迷路に、子供たちはなぜ魅入られるのであろうか。（…）／以来、ぼくにとって、世界は迷宮になった。人生は迷路になった。世界そのものが迷宮、人生そのものが迷宮というのではなく、人間が世界を迷宮に仕立て、人生を迷路に仕立てているのだと思うようになったのである。いや、こういういい方も適切ではあるまい。人間は世界を迷宮に仕立てることができ、人生を迷路に変えることができるのだというべきであろう。想像の力によって。表象の力によって。」

地上という迷宮をさまよい
世界という謎のまえで立ちすくみ
私という秘密のなかをとぼとぼ歩く

人は問いつける
問いつけるために問う
答えのなかには迷路はないから

たったひとりで
世界のなかに立つ私であるために
自由へと歩むための迷路を求めて



■桂米朝・筒井康隆『対談・笑いの世界』（春秋社 1999.8）

急がば笑え
まわり道
自分を笑い
まわり道

前にゆくなら
後ろへさがり
上にゆくなら
下へとくだり

自分を笑ってなんぼ
笑われてなんぼ
道化ること
世界はまわる

「筒井 東京で、人のいるところで二、三人で笑うたりすると、自分が笑われているんやないかとか、不謹慎に思うとかで怒る人がある（笑）。大阪では、それはあんまりない（笑）。（・・・）筒井 大阪では河内音頭というのがあるけれども、ぼく感覚では、何というのかな、わたしはアホでちっとも何にも知らないけれどと、自分を徹底的にまず貶めておいて、それから政治をやっつけたり何やかやという、あれは笑いではなくて。／米朝 そうそう。あれは演出やね。／筒井 自分がいかにアホで駄目な人間かというのをえんえんとやる。それをえんえんとやったやつほどうまい。／米朝 今年あたりでもまだ夏場になったら、河内のほうへ入ったらやってますけど、いっぺん行ってもきつと面白いわ。今言うた、自分を貶めたり。こんな文句も何もちっとも読めないけれどもとか、せんど言うて、本文をちょこっとやって、切り場がこれまた長い（笑）。この先まだやりたいけれどもとか何とかかんとか言うて、最前からちっとももうええ加減に下りいという合図があったやとか（笑）、次の先生がお待ちかねやとか何とか（笑）、言うて、初めが五分くらいで、おしまいも五分あって、間の本文も五分ぐらいしかないのや（笑）。面白い。」

mediopos-196

2015.5.30



■坂部恵『ヨーロッパ精神史入門／カロリング・ルネサンスの残光』（岩波書店 2012.10）

「一四世紀、通常中世末と性格づけられる時代の哲学における最大の論争点であった、「唯名論」と「实在論」の対立、オッカム派（新派）とスコトゥス派（旧派）の対立は、今日では通常つぎのような問題をめぐるものと理解されています。すなわち、「普遍的なものども」（universalia）（「動物一般」とか「人間一般」とかいう類あるいは「種」）は、（典型的にはプラトンのアイデアのように）、「实在する」のか、それとも、实在するのは個々の人間、個々の犬といった個体だけで、類や種は「唯名的」な、すなわち名ばかりのものなのか。／もちろん、前者の主張が「实在論」（リアリズム）のもの、後者の主張が「唯名論」（ノミナリズム）のものと考えられます。」

「一四世紀の哲学のメイン・イシューである、「实在論」と「唯名論」との対立は、通常そう理解されるように、個と普遍のプライオリティ如何という問題をめぐるものというよりは、むしろ、（…）個的なものをどう捉え、ないしはどう規定するかにかかわるものであることがあきらかになってきます。／すなわち、個的なものを、元来非確定で、したがって（…）汲み尽くしえない豊かさをもち普遍者や存在をいわば分有するものと見なすか、それとも、まったく反対に、それを、いわば第一の直接与件として、しかも単純で確定された規定を帯びた、世界と思考のアトム的な構成要素と見なすか。／「实在論」と「唯名論」の対立の困ってくるところは、このような考え方のちがいにあるとおもわれます。／事実、そして、このように問題を押さえておくと、一四世紀における「ヨーロッパの哲学」の大きな転換が、何を意味し、またどのような射程をもっていたかが、これまでよりもはっきりと見えてくるのです。」

アイデアから見るか
モナドから見るか

存在から見るか
無から見るか

永遠から見るか
刹那から見るか

私から見るか
汝から見るか

分けて分かって
むすんでひとつ

むすんでひらいて
ひらいてむすんで

宇宙はひとつ
ひとつは無限

mediopos-197

2015.5.31



■森本達雄・編訳『原典でよむ タゴール』（岩波現代全書 2015.5）

（「アインシュタインとの対談」より／E＝アインシュタイン、T＝タゴール）

「E あなたは神を、この世界から超越したものとして信じていますか。／T 神は世界から超越してはいません。人間の無限のパーソナリティは宇宙を包含しています。人間のパーソナリティに包摂されないものは、ひとつとして存在しません。そしてそのことは、宇宙の真理は人間の真理でもあることを証明します。（・・・）
／E 宇宙の実体について、二つの違った考え方があります。一つは、人間性とかかわりをもつ実体としての世界であり、他は人間的要素とは関係しない独立した実在としての世界です。（・・・）真理は人間性とはかわりのない、確かな真実として認識されなければなりません。わたしはこの事実を科学的に実証することはできませんが、固く信じています。（・・・）
／T 世界の存在と一体である「真理」は、本質的には人間的であるはずで。そうでなければ、わたしたち個々の人間が真実だと認識するすべてのものが、真理とは呼べなくなるからです。（・・・）真理を理解するばあい、普遍的な人間の精神と、個人うちに限定される、精神とのあいだの永遠の葛藤が続きます。その両者に折り合いをつけようとする絶え間ない過程が、わたしたちの科学と哲学とのあいだでも、また私たちの倫理でも続けられてきました。ともかく、人間性とまったく関係のない真理があるとすれば、それはわたしたちにとっては、完全に非存在です。（・・・）わたしの宗教は、わたし自身の個我のなかにあつて、個人を超えた至高の人間、すなわち普遍的な人間の精神と一体化することにあります。これが「人間の宗教」と題したわたしのヒバート記念講演のテーマでした。」

真理という大海より出で

小さな雫ともなり

形なきものから 形あるものへ

形あるものから 形なきものへ

ひとは永遠の往還を繰り返しているのです

宇宙は真理を奏でているのです

たとえ耐えきれないほどの

孤独のなかで沈黙しているときにさえ

ひとはみずからを豎琴として

美の調べへと誘われているのです

mediopos-198

2015.6.1



■竹内敏晴『ことばが劈かれるとき』(ちくま文庫 1988.1)

「折口信夫によれば、「かたる」とは「うたふ」あるいは「うつつたふ」と対比されることばであると言う。／「相手の魂をこちらにかぶれさせる、感染させるといふことなのです。親鸞聖人の遺文を見ますと、自分が法然にかたられまつつたといふやうに書いてあります。つまり法然上人に騙されて、私は浄土信仰に入ったのだけれど、是が却つて幸福だ(中略)と、斯ういふことです」(『伝承文芸論』)／私たちは、このような力を、ことばから失いかけている。私たちは「語る」力を持たねばならない。それはことばのいのちなのだ。」

「メルロ＝ポンティの未完に終わった遺著は「見えるものと見えないもの」と名づけられていたという。これは『パイドン』の中のソクラテスのことばではないか？ テイラー＝林竹二の言う如く、現代では常識化している、魂こそ人間の真の(道徳的並びに知的主体としての)自己であるとする観念をはじめて確立したのがソクラテスであったとすれば、メルロ＝ポンティはそこに始まるヨーロッパ思想の全歴史と対決していたわけであり、かつはるか東洋へと視線を向けながら、ふたたび魂と肉との融合を根拠づけるべく苦闘していたわけであろう。「からだ」の問題に手をつけることは、地獄のカマのフタを開けるようなものだ、と私は思う。目に見える、この肉体の奥深くうごくめくものと、出会い、呑みこまれ、あるいは導かれつつ、それを超えること、それは容易ならぬ、古の人が悪竜との戦いと象徴したに値する事業に違いない。」

からだは見えているか
ことばは聞こえているか

見えているからだ
見えていないからだ

聞こえていることば
聞こえていないことば

からだは劈かれねばならない
見えないからだのほうに向かって

ことばは劈かれねばならない
聞こえていないことばのほうに向かって

mediopos-199

2015.6.2



■岩波敦子『誓いの精神史／中世ヨーロッパの<ことば>と<ところ>』（講談社選書メチエ 2007.7）

「誓い」とは「ことば」によって過去と未来とをつなぐ行為である。身体に刻み込まれた「誓い」の記憶を共有することで、人びとは歴史をつくり上げてきた。「誓い」という形で放たれたことばが影響力を行使し続けうる背景には、人のつながりを長い時間軸で捉えようとする人間の叡智が存在している。さまざまな局面で発せられる「誓い」のことばを思い出して欲しい。「いついつまでこの誓いは有効です」と、期限つきで立てられる「誓い」などありはしないのである。／ところが日本社会で遭遇する「誓い」の場面には、この留保条件が見え隠れする。「誓い」を立てた場を離れさえすれば、いや「誓い」を立てた場ですら、「誓い」の有限性を前提にしたかのような発言が見られる。いったん立てられた「誓い」は有限のときを超えて、いつまでも効力を持ち続けなければならないはずなのに、永遠のときを志向するはずの「誓い」がある時空で切り取られ、有限のときの中でその有効性を制限されている。この意識の違いは、紐帯の刹那的性格にも通底しているように思う。相互義務と永続する時間、「誓い」を介して結ばれる関係が前提としている諸条件が、少なくとも現代の日本社会では欠如しているように感じられる。／「誓い」によって結ばれた関係は、社会の礎であると同時に、「誓い」は他人との距離を測る指標でもある。ヨーロッパ中世社会において「誓い」が、さまざまな局面で結節点として登場するのは驚くばかりだが、同時に、ヨーロッパ中世における「誓い」の歴史は、社会が何によって結ばれ、何を作り上げる場なのかを再考するきっかけを与えてくれる。そして「誓い」という光をあててヨーロッパ社会を見直してみると、時空の中に放たれたことばこそが人びとを結びつけるのだという事実を再認識させてくれるのである。／私たちはことばを無責任に言い放ってはならない。「誓い」は自己呪縛であると同時に、「誓い」を向けた相手をも縛る力を持ち合わせている。ことばは両刃の剣、相手に向けたことばは自分にもはね返る。人と人を結ぶことばの呪縛力に再び思いを馳せるとき、私たちはもう一度他人にやさしくなれるのかも知れない。」

誓いは永遠に向けられている

永遠とはみずからの限りない深み

誓いがいまの私をつくっているのだ

誓いが永遠を忘れるとき

みずからの深みも忘れられ

私は行方を失いさまよいはじめる

軽い言葉はみずからの深みを軽くし

呪詛する言葉はみずからを呪詛へと変え

捨てられた誓いはみずからへの裏切りとなる

人に向けられた言葉はやがて

みずからを鏡として深みから帰還し

私に向かって発せられる言葉となるだろう

真の誓いを思い出すとき

誓いは永遠への祈りとなり

みずからを限りなく自由にする



■ドロシー・マクレーン『樹木たちはこう語る』（日本教文社 2009.1）

「(木のディーバ) 人間が様々な次元での機能を有し、様々な世界で働いているのと同様に、私たちもまた、様々な違う方法で働いています。神とは意識そのものだからです。木や植物は人間に比べてほんの少しの意識しか持っていませんが、私たちは生命の成長する自意識の背後にある存在なのです。神は常に手足を必要としています。そして私たちは、自己意識へ、さらには神の意識へと向かう成長のための手足そのものなのです。私たちは遠い過去のあなたの成長の一部です。そして又、今のあなたの成長の一部でもあります。あなたがすべての源へと立ち戻り、源の手足となる時、あなたは私たちの内にあるこの生命に気づかざるを得ません。なぜならば、神でないものは何一つ、存在しないからです。あなたが私たちの役割を深く認識し、それに従って行動すればするほど、この地上やその他ありとあらゆる場所のすべての生命にとって、良いことが起こるのです。」

私のなかの
ひともとの樹よ
耳をすませれば
聴こえてこないか

種となって蒔かれ
芽を出し葉をつけ
空へと枝を伸ばし
風とともに歌う声が

私のなかの
静かな木陰で
奏でられている
ひとときの永遠